
足りない世界の修練師

うたまろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足りない世界の修練師

【Zマーク】

Z8030T

【作者名】

うたまろ

【あらすじ】

この世界には、たくさんのファンタジーが転がっている。魔法に迷宮、魔王に勇者。さあ冒険に出よう！！一攫千金も夢じやない！！でもやっぱり何か足りなくないかい？

足りないもの（前書き）

暇つぶしに書いてみました
物語の導入?
まあそんな感じです

足りないもの

この世界には、圧倒的に足りないものがある。

生前、尊敬する我が偉大なる祖父は頻繁にそう漏らしていた。

いつたい、その足りないものが何を指しているのか。

まるで俺を試すかの様に、また俺の悩んでいる姿を楽しむかのように、何度も何度も問い合わせてきた。

そして祖父は、息を引き取るそのときまで、俺に明確な答えを示すことはしなかつた。

だが、祖父との最後の会話となつたあのとき、俺がない頭を捻りに捻つて出した答えに驚きの表情を浮かべ、そして俺の大好きだった意地悪そうな笑みを満足気に浮かべて祖父は逝つた。

別に、祖父に誓つた訳ではないが、自分の出した答えを実証するために、俺は問い合わせを一日たりとも欠かさず実践してきた。

そして、その問い合わせを出すためとはいえ、今現在の俺は相当の変わり者扱いを受けることになつているワケで

「おおお、万年修練師サマも一端の冒険者気取りですかあ？」

いつもして絡まれる事にも、正直慣れてきたワケで

「おや？ 兄上、今日も懲りずに探索ですか？” 加護”が貰えないのですから才能がないことは分かっているのでしょうか？」

弟にまで馬鹿にされるのは正直結構きついワケで

「ふむ、今日も行くのかい？ 私も一緒に行つてもいいかい？」

それでも理解してくれる人はいるワケで

「お帰りなさい、今日も怪我がなさそうで良かつたです」

心配してくれる人もいるワケで

「ハハツ、つまり今日もいつも通りの日常つてワケさーー！」

そう、この世界には - - 鍛錬・修行 - - が足りないーー！

だが、これは俺の持論だから、真似して失敗しても自己責任で頼むぜ？

足りないもの（後書き）

読んでくださった方、続きを読む気になってしまった方

最初に言つておきます

ありがとうございます、でも不定期更新です

世界に名だたるなごやり（前輪セイ）

まだまだ
始まりません

それでも良こよね？

世界に名だたるなどやひ

世界に魔法がある。

世界に魔物がいる。

魔物を統べる王がいる。

世界に迷宮がある。

迷宮には、宝石が、武器が、素材が、隠された歴史が、夢がある。

人々は向かう、迷宮へ

叶えたい夢を、野望を、欲望を持つて。

これは、そんな世界の話

冒険者達が命を対価に夢を追つ話

男の、女の、その他全ての生き物の思惑を内包して廻る世界の話で

ある。

第一話・世界に名だたるなんとやら

迷宮都市ハンニバル

世界にある三つの大陸のうちの一つ、主に人間達の国がある大陸フイーリアス、そのちょうど中心に位置する都市であり、都市とは名ばかりで何処の国にも所属しない独立した機関として存在している。

その名が示す通りに街にはいたる所に迷宮が点在している。実際には、迷宮があつた所に街ができたと言つのが真実ではあるが。現在も迷宮の総数は、正確には把握されておらず、数年に一度ぐらいいの割合で新たな迷宮が発見されている。

迷宮には、魔物が住んでいる。

いくら冒険者が倒しても尽きることが無く、沸き続け、深く潜るほど強力になる。

初級の冒険者の潜る迷宮は、最下層が20～50階程度

中級からは50～100階

上級になると100～??階

となつており、現在確認されている最高深度は、1023階層あつた”深緑の迷宮”である。

また、500階層を超える迷宮を最初に制覇した者を”魔王”と呼

ぶ。

現在確認されている魔王は10人。

魔王となつた者は迷宮最下層を制覇した時点でそこに魂を記録され、魔王の権利を破棄しない限り不老となる。

不老という褒美も、冒険者達を迷宮に惹きつける要素の一つとなつてゐる。

また、制覇した迷宮を指揮下におくことができる。

迷宮内に徘徊する魔物を指揮下に、故に”魔王”なのである。

こつした迷宮は、この世界の何処を探してもこの都市にしか存在せず、人々は”世界の中心”とも呼ぶ。

この都市の運営は、ギルドという組織が行う。ギルドのトップにギルドマスターを置き、その下に三大陸の各国から一人ずつ、任命された評議員が合計一二人、外部に三賢人という查問機関まで設けられている。

そんな、迷宮都市の冒険者育成学校

12の国々が出資しあつて作り上げた冒険者になるための学校

全校生徒数1800人

全3学年あり、16～18歳の初級冒険者達が学ぶ場

存在する学科は二つ

総合学科と特別学科である。

総合学科の上位者20名が特別学科の生徒となり、2学年目から現役の上位冒険者などの特別指導が組み込まれることになる。

というのは昔の話で、実際は出資国のいくつかの国の王族が学ぶ場となってしまっているのが現状である。

そんな学校の第2学年のある教室

生徒達が出払った夕暮れの教室にて、モゾモゾムニヤムニヤと動く一つの影

何のことは無い、男が一人寝ているのだ。

彼こそがこの物語の紡ぎ手

そう、この物語はもう始まつ「でへへ……せんせえ～……一人つき

りでイケナイ授業なんて僕困つひもつなん~ ムーや..... ぐう 「

始まってるのだ。

世界に名だたるなんやら（後書き）

前略

主人公は変態です。

そして、まだ名前は出ません

前回の終わりにいい感じに爽やかだったのですが
今回はこんな感じになりました

H口やか（H口 + 爽やか）、たまに熱血です

最後に

読んでくれてありがとうございました

非凡なれど非才

今から17年前、迷宮都市ハンニバルに一人の非凡なる者が誕生した。

2歳にして言葉を話し、3歳にして文字を書き、4歳にして魔道書を解する。

知れば誰もが天才と褒め称えるであろうその子供。

しかし、その子供は祝福されること無く、隠れるかのように育てられた。

何故なら、恐れたのだ。

子を産んだはずの両親が、他の親族が、彼のあの見透かすかのような深紅の眼と溢れる魔力を。

それからというもの、彼はずっと独りだった。

本来与えられるはずだった、両親からの無償の愛を彼は得られなかつた。

だが、彼が心を閉ざしてしまった前に救いの手を差し伸べた者が居た。彼を救つた者の名前はベルゼルード・フラムハート。彼、ラヴァーナ・フラムハートの祖父であった。

第一話・非凡なれど非才

ベルゼルード」とベル爺がラヴァーナを引き取つてから3年の月日

が流れた。

その3年の間、ベル爺は月に一度決まってある事をラヴァーナに問い合わせる。

「おい、ラヴ坊」

「ジジイ、ラヴ坊はやめろって言つてんだろ？」「！」

「この世界に足りないもの、何か分かるか？」

「聞けよ！ 人の話をよお」

こんなやり取りを、もう実に3年も繰り返しているのである。
3年も繰り返せば分かってることもある。

それは、ベル爺が真面目に問いかけているのか、そうでないのかである。

そして今日は、後者であったようだ。

「んで？ 今日は何が足りねえんだ？」

「うむ、実は紅茶の葉が切れておつての、買つてくれ」

年に数回の真面目な質問以外、割と内容がいい加減なため、ラヴァーナはおざなりに対応する。

「はいはい、行つてきますよお」

「はい、は一回でよい、それとついでに今日の鍛錬を課そつと思つ

そう言つてベル爺は、鍛錬をさせる。

早朝の剣の素振りから始まり、1時間にも及ぶ瞑想などなど。

これは、ラヴァーナが引き取られてから、ほぼ毎日見られる光景であり、現在は引き取られた当初の倍は鍛錬をしているという状況だ。

「また思いつきで鍛錬追加かよ……んで？ 何をどうすればこいんだ？」

「つむ、走つてこ」

ベル爺からの指示は単純明快であった。

がしかし、少し端折り過ぎた感が否めない。

「それは、走つて置い物に行けって事かあ？」

「いいや、街の周りをぐるっと一周してから帰つて来いってことだ

「んな！？ 一周つてどんだけあると思つてんだ！」

「さあなあ？ だが、それをすれば強くなれるぞい？」

「強くなれる」その言葉は、ラヴァーナに劇的な変化をもたらす魔法の言葉だったようだ。

先ほどまで渋つていた様子だった彼の目が「やつてやるぜー」っとばかりに輝きをました。

「へつ、やるよー やればいいんだろー！ 行つてくるー。」

そう言つが早いが、ラヴァーナは家を飛び出していく。

「ああ、行つてこ。そして強くなり、こつか答えを見せてくれ

残されたベル爺は、もうこじらなこラヴァーナに言い聞かせるよ
うこそつと呟いた。

「わしは、氣づくのに少し時間が掛り過ぎてしまったからな……」

その声には、若さへの羨望とラヴァーナへの期待が混ざった様な響
きであった。

そこから少し時間が進む

たつた4年ほど。

半年ほど前にベル爺は逝った。

最後に見た笑顔は、一生彼の記憶から消えることは無いだろう。

この4年が彼、ラヴァーナへと与えた変化は多々ある。まず背が伸びた。現在11歳となつた彼の身長は160センチを超えていた。

それから体力もついた。街を一周してもそれほど疲れなくなつた。素振りの音が変わつた。ブン、からシュンへと振りの速さが増しているようだ。

そして何より周囲からの評価が変わつた。

4年前までの非凡なる者への畏怖といつ家族からの評価は、現在では非才なる者への蔑み、見下しへと姿を変えていた。

その大きな要因が“加護”である。

この街の人間は、10歳になると“加護”を受けるために神殿へと向かう。

そこで、自分を守護しているモノから加護を受ける。

本来であれば、神に上下という概念は無い筈なのだが、この街が冒険者の街であることが災いとなつた。

この街の世評では、闘う手段を司る神からの加護が最上位となる。その他には、回復技能を与える治癒神、魔法を司る魔神、知恵を司

る賢神などは上位。

魔法を使えるようになる精靈、闘う力を得られる戦神、知恵を「え
る知神などは中位。

基礎的な身体機能の向上となる武神などは、下位。

戦いにおいて何の能力も与えないモノ達、財を「える商業神などは
最下位である。

ラヴァーナに「えられた加護は、豊穰神イシュタルのモノ。
神としては最上位。

しかしこの街では、最下位ともいえる神の加護であった。

故に、彼の評価はこの街では非才。
才豊かな者が、知られる」と無く才無き者と呼ばれるようになった
瞬間である。

そのことを理解している筈だが、加護を得た日に彼は祖父であり父
であつたベルゼルードに言つた。

「せつかく貰つた加護だ、この力でうまい野菜でも育てようかな。
それと、明日からは今まで以上に厳しい指導を頼むわ」

そこに、悔しそうな色や諦めといった雰囲気は一つも無く、逆に挑
戦的な笑みを口の端に乗せていた。

あるいはこの時に、ベルゼルードは答えを魅せられていたのかもし
れない。

「この世界には、足りないものがある。

ベル爺は、この時からあの質問をして「なくなつた。

死ぬ間際のあの瞬間まで。

そして時間は戻る。

彼が、祖父の死を乗り越え

周囲からの視線に動じなくなり

冒険者となつて3年が経つて独り立ちする、17歳の誕生日まで

非凡なれど非才（後書き）

9件ものお気に入り登録ありがとうございます。

亀のようにゆっくりとした更新ですが、これからもじ愛読いただければ幸いです。

前話で始まるよーーー！

みたいな内容だったのにいきなり主人公の概略からでした。一応、何度も見直しましたが、誤字があつたらすみませんあと、読みにくくてすみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8030t/>

足りない世界の修練師

2011年8月14日00時44分発行